

ゴーシュは町の活動写真館でセロを弾くかかりでした。けれどもあんまりじょうずでないという評判でした。じょうずでないどころではなくじつ

ひるすぎみんなは楽屋にまるくならんでこんどの町の音楽会へ出す第六交響曲の練習をしていました。

クラリネットもボーカーとそれにてつだっています。

バイオリンも一いそ風のように鳴っています。

ゴーシュも口をりんとむすんで、目をさらのようにして楽譜を見つめながら、もう一心に弾いています。

にわかに、ぱたつと楽長が両手を鳴らしました。
みんなびたりと曲をやめてしんとしました。楽長がどなりました。

「セロがおくれた。トオテテ テテティ、ここからやり直し。はいっ。」

みんなは今のところの少し前のところからやりなおしました。ゴーシュは顔をまつ赤にして、ひたいにあせを出しながら、やつと今言われたところをとおりました。ほつと安心しながら、つづけてひいていますと、楽長がまた手をぱつとうちました。

「セロっ。糸が合わない。こまるなあ。ぼくはきみにドレミファを教えてまでいるひまはないんだがなあ。みんなはきのどくそうにして、わざとじぶんの譜をのぞきこんだり、じぶんの楽器をはじいてみたりしています。ゴーシュはあわてて糸を直しました。これはじつはゴーシュもわるいのですが、セロもずいぶんわるいのでした。」

みんなはまたはじめました。ゴーシュも口をまげていつしおけんめいです。そしてこんどはかなりすすみました。

「ではすぐ今のつぎ。はいっ。」
人でした。ゴーシュはそこで、さつき自分の時みんながしたように、わざとじぶんの譜へ目を近づけて何か考えるふりをしていました。

「ダメだ。まるでなつていない。このへんは曲の心臓なんだ。それがこんながさがさしたこと。」

そらと思つてひきだしたかと思うと、いきなり楽長があしをどんどんふんで、どなりだしました。

「ダメだ。まるでなつていない。このへんは曲の心臓なんだ。それがこんながさがさしたこと。」

音楽を専門にやっている僕らが、あの金靴鍛冶だの砂糖屋のでつちなんかのよりあつまりに負けてしまったら、いつたいわれわれの面目はどう

よ。演奏までもうあと十日しかないんだ